

きっかけをつなぐ旅によう「パスポート」

PASSPORT.

vol.66
FREE PAPER
地域の出来事に触れる
ソーシャルマガジン

あいずみスマイリーマルシェ 特集



何
する
で？



Editor's note 編集後記

虹のように輝く笑顔が見えた旅でした。

どんな困難の中でも決してぶれることのない実行委員会の人達の温かさ。代表である武田さんの懐の深さ、全員が互いを気遣い合っているという関係性がたまらなく心地良い。そして課題と向き合い、関わる人達のことを考え続けるその姿勢はこれからのあいずみスマイリーマルシェを益々発展させていくことでしょう。学びも悔しさも楽しさも、この取材を通して教わったこと、感じたことを少しでも皆様にお届けできれば幸いです。

— 長谷川 (構成/写真)

イベント当日はかなりの雨。残念だったと言うだけではなく、なにか別の表現にしたいと考え、今回のデザインテーマを“虹”にしました。降りやまない雨はなく、そして虹がかかるように、困難だと思っていたことや今まで培ってきたものは、来年に必ずつながる希望になると思います。多種多様な色をみせるメンバー・出店者の皆様が作り出す場所“あいずみスマイリーマルシェ”。どうか来年は絶対に晴れますように！

— 神倉 (デザイン)

NEXT ISSUE 次回予告 2018年10月配布予定。次回の旅も是非お楽しみ下さい。

 とくしま市ほせんター TOKUSHIMA NPO CENTER

発行月 2018年9月
号 数 66号
発行 徳島市市民生活力開発センター
〒770-0847 徳島県徳島市幸町3丁目71番地の1 幸町会館1階
[TEL] 088-611-3886
[FAX] 088-624-3860
[mail] nposhimin@fm.nmt.ne.jp
[WEB] www.tokushima-shikatsu.com



↑ 大学生を紹介する 長谷川



↑ 説明を聞く 神倉

ABOUT PASSPORT.

“PASSPORT.”それは皆さんを特別な旅へとお連れするチケット。行く先に広がるのは、団体の活動や人の想いに溢れた景色。見て、感じて、もっと知りたくなる。そんなきっかけをつなぐソーシャルマガジン。これを手にする皆様に、どうか素敵な出会いがありますように。

See you next time.

この広報誌に関するご意見、ご感想は発行元である徳島市市民生活力開発センター(088-611-3886)までご連絡下さい。

 とくしま市ほせんター

人と繋がり、地域を知る“交流の場”

第5回あいずみスマイリーマルシェ。
降りしきる雨の中とは思えないほどの人の賑わい。
ハンドメイド雑貨や地場のお野菜、
飲食店が勝瑞館跡に軒を連ねる。
店舗数は110軒に及び、
藍住町外や県外から出店するお店もあるほどだ。
多種多様な職種のメンバーが集まった
7人の実行委員達。
彼らの日常と、イベント運営を支えた
学生達との出会いに迫る。

あー虹だ！

あいずみスマイリーマルシェ

— What is Aizumi Smiley Marche? —

会場となるのは藍住町が誇る貴重な歴史文化遺産「勝瑞館跡」。
住民参加型で地域生活者の交流を図ることで、
勝瑞城の歴史を将来へ伝え繋ぎ且つ地域の活気と賑わいを創出し、
「藍住町に住んでみたい、藍住町に行ってみよう」
と思われる町づくりを目指す。

■ プロジェクトのご参加やお問合せはこちら
[TEL] 090-2828-6456 (武田)



詳しくはこちら





↑ 出店者説明会の様子

↓ 取材に応じてくれた「花子さんのキムチ」。本場韓国の味が楽しめるお店だ。



同じく取材した「就労支援センターハーモニー」では
手作りのお菓子を販売していた。→



とはいえ、降りそそぐ雨の勢いは相当なものである。そんな中でもこれほどの人が集まっているのは一体どうしてなのだろうか。来場者へ話を伺ってみることにした。

さて、そんな実行委員会がつくる第5回あいずみスマイリーマルシェ。天候は生憎の雨、5月13日に開催された。イベントは決行されるのだろうか、お客さんは集まるだろうか、そんなことを不安に思いながら現場へと赴く。しかしその会場は、色とりどりの傘やテントで彩られていた。雨が降っているにも関わらず、数えきれないほどの人々で賑わっていたのだ。出店者と来場者、あるいは出店者同士での交流が生まれている様子も垣間見え、実行委員の人達が持つ温かい雰囲気がこの会場にも溢れているように感じた。

「作っている方とお話できるのがすごく魅力的です。」
「じっくり丁寧に愛情込めて作ってくれた作品に出会えるから。」
「気さくに話しかけてくれたりする雰囲気がとても好きで、びしょ濡れになっても絶対に行く決めていたらしい。色んなマルシェに行くが、このあいずみスマイリーマルシェの空間は特に素敵だという。」

続いて出店者へ話を伺う。
「販売に行くというよりも、遊びに行く感じ。」
「実行委員会の人達の魅力！みんな楽しんで作るのが伝わってくる。」
「あの雨であれだけの人が来てくれたのに感動した。実行委員会の人が動いてくれたおかげなんだろうなあ。」
出てきた言葉は、楽しい、といったものや、実行委員会への感謝であった。会場に集まる全ての立場の人が感じる居心地の良さ、どうやらその要因は実行委員会のメンバーが作る雰囲気か鍵になっているようだ。

「準備からここに至るまで取材を通して見てきたが、7人という実行委員の規模でこれほどのイベントを開催するのは決して容易なことではない。それなのに、なぜ、彼らは仕事の合間を縫って活動しているのか？その理由を尋ねてみた。」
「達成感が半端なかったんよなあ。」
「学べることが多いけん。」
「全然知らなかった人らと知り合える。」
中でも全員が口を揃えて言っていたのは「このメンバーやけん。」
改めて、メンバーの絆の深さを感じた瞬間だった。

←本部に行くと温かな笑顔が迎え入れてくれる。



誕生日サプライズ後の集合写真

とある日の実行委員会、突如、それは決行された。「Happy Birthday!」
ケーキと花束を持った実行委員達が事務所へなだれ込んでくる。一体何ごとかと思いきや、誕生日祝いのサプライズなのだという。この雰囲気はとても良い。皆のテンションが高いというかとにかく楽しそうである。何度か実行委員会に参加させてもらっているが、そう感じたことは今回に限った話ではないのだ。基本的に会議中にも笑いが絶えないのだが、驚くべきことに切り分けたケーキを食べながらも着々と話は進んでいく。こういったサプライズを計画し実行する行動力、楽しみながらもやるべきことはしっかりと進めて行く切り替えの早さは、売場人であるが故なのだろうか。代表である武田さんを中心に、終始和やか（賑やかと言った方が適切かもしれない）に会議は進められる。

key persons /



代表
武田 康弘
(武田石油)



副代表
井上 妙
(さとう農園)

あいずみスマイリーマルシェ 実行委員会の日常

Aizumi Smiley Marche Everyday.



学生との出会い、マルシェを支えたもう一つの物語



自分達のブースの看板。↑



コンテナを運ぶ。↑



子ども達とママへのプレゼントを作る。↑



↑取材にて部活の宣伝をしている様子。

筆者が所属する徳島市市民活力開発センターでは、地域活動やボランティア活動に取り組み団体を支援している。支援と言ってもその方法は様々であり、仲介役として団体同士や行政とのマッチングを行うことも少なくはない。

平成29年12月、とあるイベントに参加した私はあいずみスマイリーマルシェの副実行委員長である井上さんに会うことになる。

井上さんから「学生の子達とイベントがしたい!」という相談を受けたのだが、これまでのあいずみスマイリーマルシェには子ども連れの家族が多く遊びに来るにも関わらず、その子ども達が滞在できる場所が少なかったらしい。子ども達が滞在できるような場所や楽しんでもらえる場所を作りたい、そしてそれを学生達と一緒にできないかという相談だった。

「私達にはない発想力を存分に発揮してほしい、そのために協力できることは惜しまないし、イベントをつくっていく中でこの場所のことは知ってもらえたら嬉しい!」そんな井上さんの話を聞いて、私は四国大学のフレンドリーキッズクラブを紹介することに決めた。四国大学フ

「あの子達がおらな今回のイベントはできなかった。」実行委員達が口々にそう語るほどの活躍。会場内で子ども向けのブースを展開するだけでなく、前日の準備から当日の運営の多くを彼女達が支えていた。

しかし、結果的にフレンドリーキッズクラブには多くの負担を担わせてしまうことになる。当日の大雨により想定しきれなかったことも多くあった。的確な指示をすることもできず、任せきりになってしまふ場面もあった。彼女達からは、「楽しかった」「実行委員の人達がいい人達だった」といった声とともに、「しんどかった」「もっと子どもと関わることに注力したかった」「自分達の立ち位置がよく分からなかった」という意見なども挙げられた。あいずみスマイリーマルシェ実行委員の人達の想い、何のためにこのマルシェを開催しているのか、それを十分に伝えることを怠ってしまった。そして、どうすれば彼女達がやりがいをもって活動に取り組むことができたのだろうか

フレンドリーキッズクラブは子ども達を対象に様々な活動に取り組んでいる部活動だ。大学祭や自主イベントにて子ども向けの遊びブースを展開することもあれば、保育園や学童、ボランティア団体や行政から依頼をもらって出向くこともある。これまで何度かイベントで彼女達と関わったことがある筆者は、彼女達ならやりがいも楽しさも体感しつつ、あいずみスマイリーマルシェという場をより良いものへと進化させることができるのではないかと思ひ、顔合わせの場をセッティングすることにした。

「こんなことできたらおもしろそう!」

顔合わせ初日、フレンドリーキッズクラブからは子ども達を楽しませるための案が次々と出てきた。迎えた当日は雨天につき用意した全てのコンテンツを実行することはできなかったが、母親へのプレゼントを作ったり、新聞紙のブルで遊んだり、子ども達の笑顔が会場を彩る。



↑学生達と話す井上さん。



実行委員会に参加する学生達。↑



部室にて準備を進める。↑

と、役割をもっと考えなければならなかった。子ども達を楽しませたいという彼女達の「途な想いを活かすしきれなかったのは、両者を繋ぐ立ち回りをしていた私自身の反省点だ。

―数日後、実行委員会ではこれからのことを話し合っていた。どうすべきであったかと、来年に向けて解決策を模索する。武田さんは「学生達に頼り切りになりすぎて申し訳なかった。もっとこちでできることもあったと思うし、あの子達が企画したことをしっかりと出せる場づくりを運営側できるようにならないかん。」と、決意を新たにした。

加えて、マルシェが開催できているのは関わってくれている全ての人の協力があってこそだと言う。楽しみにしてくれているお客さんにも、出店してくれる店舗の方々にも、支えてくれる地元の人や行政の方、学生の子達にも、しっかりと顔向けできるものにしていきたい。「支えてもらうだけじゃなくてこちから何かお返しできるようなにならないと」。数々の反省点と向き合い、いつでも自分達と関わる人のことを考え、先のことを見据え続けるスマイリーマルシェの実行委員達。

「マルシェを通して様々な人と繋がり、地域を知る。藍住町の交流を生み出すこの場所が、人々を繋ぐ架け橋となるように。」

イベントが終わってしまった寂しさと、来年への期待が入り混じった不思議な感覚とともに、反省会は幕を閉じたのだった。



四国大学
フレンドリー
キッズクラブ
詳しくはこちら

I hope it will become fine...

初めての顔合わせの様子。

